

口承文芸の国際比較

伊藤 清司

他の執筆者諸兄弟との重複を避けて、私個人の知見をもとに回顧と今後への期待を述べる。本学会の創立の趣旨は臼田甚五郎氏の「日本口承文芸学会の創立」(本誌第一号)に陳述されているとおり、斯学の国際交流、国際的比較研究の必要によるものであった。事情の違いはあるものの同様の動きは文化大革命終熄間もない中国側にもあった。中国民間文芸研究会の徳瀨によって一九八〇年末、本学会関係者九名が中国を訪問、両国の学術交流について意見が交された(詳細は飯倉照平「日本口承文芸学会代表訪中団の報告」本誌第四号)。その協議の席上、

交流の具体化の一環として私が中国に留学することが決まり、一九八二年秋から一カ年間、中国中央民族学院(在北京、現・中央民族大学)に在籍した。しかし当時の中国は文化大革命の後遺症もあり、例えば同学院の図書館は甚だ不備で利用も儘ならない情況にあり、私自身の力量不足もあって所期の目的が果たせたとはいえなかった(詳細は拙稿「私の瞻た《北京秋天》」『三田評論』八四七号、一九八四年)。

一九八〇年代はじめまでは学問に対する政治の優位性が今日以上に強く、外国人学者の現地調査は認められず、刊行された口承文芸関係文献にも学術資料としての価値を疑われるものが

少なかった(具体的な事例は拙稿「中国少数民族研究の歩み」『アジア民族文化研究』一号、二〇〇二年)。しかしその後の中国共産党・政府の政策転換に伴い、学問の位相も変化した。口承文芸についていえば故事(神話・昔話・伝説)、歌謡、俚謡の全国規模の統一的な調査・採集と記録化(三套集成)が推進され、省、市県、村鎮各レベルの膨大な資料が蓄積され、その相当部分が上梓されているが、国外の者にはその全貌が未だ明らかになっていない。その一部をみる限り、その学術的価値も格段に改善されている。資料には伝承者、採録者の姓名等や伝承地も付記され、何より政治イデオロギーの影が稀薄化し、国際的比較に堪え得る資料が文字とおり山積されつつある。

なお資料蓄積の情況は韓国でも同様である。韓国精神文化研究院編輯による浩瀚な『韓国口碑文学大系』その他の資料集が出版され、国際比較研究の諸成果が続出しつつある。

わが国の伝承文化研究は既に旧来の狭い枠を取り拂い東アジア文化の中で把握しなければならぬ必然にあるが、その国際比較はこれまでのように中国や朝鮮など隣接地域との類似点を搜り出しそれを指摘するにとどまらず、その類似の中相異、つまり東アジア文化との異同の中に認められる日本文化の特質を探究することでなければならぬ。中国の三套集成の蓄積とその内容は『韓国口碑大系』などのそれとともにこの必然とその可能性を示唆しているといえるだろう。

(いとう・せいじ／慶應義塾大学名誉教授)